

ことばをめぐる包摂と排除

[インタビュー]

言語的相互承認を通じた包摂

バルセロナ、ミラ・イ・フンタナルス小学校¹⁾ 校長
ロザ・ククルイスさんに聞く

インタビュー・構成：

塚原信行

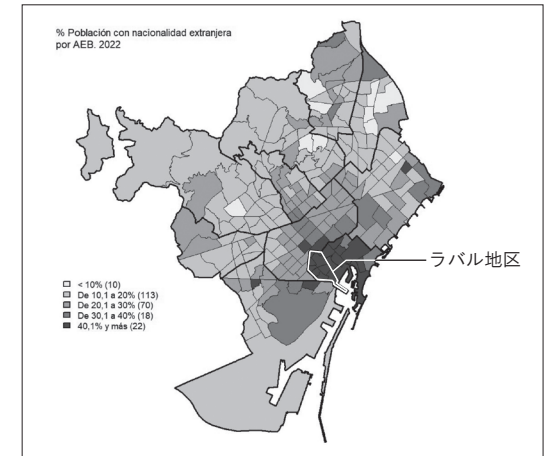
つかはら・のぶゆき

言語的超多様性都市 バルセロナ

スペインでは、2000年代に入り国外からの移民が急増し、2011年には外国籍人口が約575万人（人口比12.3%）に達する。その後徐々に減少し2017年には457万人となるが、2018年からは再び増加に転じ、2022年には554万人（人口比11.6%）に至る。特に大都市部は移民の流入が多く、人口数上位3都市の2022年のデータを見ると、首都マドリードの外国籍人口は約52万人（人口比15.8%）、バルセロナでは約36万人（人口比22.2%）、バレンシアでは約11万人（人口比14.4%）となっている。こうした状況において、移民が携えてくる言語への扱いはさまざまである。特に、マイノリティ化された言語（llengua minoritzada / minoritized language）が話されている地域では、従来からのマイノリティ化言語保護振興政策との関係から、その扱いは悩ましい。当該地域におけるマイノリティ化された言語の将来は、新たに出現したこの言語的多様性をどのようにマネジメントするかにかかっているとんでも過言ではない。この代表的な事例が、カタルーニャ自治州の州都バルセロナである。

カタルーニャ自治州は1980年代以降、全住民のバイリンガル化（スペイン語とカタルーニャ語）を通じてカタルーニャ語の維持を目指す言語政策を展開し、その要諦は公教育におけるカタルーニャ語イマージョンであった。「カタルーニャ語を学ぶ」のではなく「カタルーニャ語で学ぶ」というカタルーニャ語イマージョンにより、マジョリティ言語であるスペイン語話者の大多数を、マイノリティ化

図 バルセロナの行政区ごとの外国籍人口比率を示す図（2022年）。色が濃いほど比率が高い。白枠で囲まれているのがラバル地区。



出典：バルセロナ市役所統計局による図を一部加工
<https://ajuntament.barcelona.cat/estadistica/catala/index.htm>

言語であるカタルーニャ語とのバイリンガル話者に転換してきたのである。言語政策上考慮すべきは、基本的には、スペイン語とカタルーニャ語であった。しかし、2000年代以降の移民の流入は、カタルーニャ自治州、特に州都バルセロナにおける言語的多様性を急速に促進し、現在では300を超える言語が話されているとされる（Linguapax 2019）。カタルーニャ自治州における言語政策は、こうした言語的超多様性を前提としなければならなくなった。

バルセロナは10の行政区（Districte）から構成されており、旧市街に該当するシウタッ・ベリャ（Ciutat Vella）が最も面積が小さい（約4.1平方キロメートル）と同時に外国籍人口比率が最も高く、実に52%²⁾ほどに達する（人口約10万6千人のうち5万5千人程度が外国籍）。シウタッ・ベリャ行政区はさらに4つの地区に分割されており、そのうちの1つであるラバル地区が、最も面積が小さく（約1.1平方キロメートル）、最も人口が多く（約4万7千人）、さらに、最も子ども（0歳-15歳）人口比率が高い（約14%）（図）。ラバル地区は、狭い空間に、出身地を異にする多くの外国人が居住し、しかも子どもが多い、という場所なのである。また、1980年代から都市再生計画が進められた結果、ラバル遊歩道